

第2話 デジタル化する心(2)
色と形

●前号で写真家の言葉として

『人間の視覚が自然でない派手な色を記憶色として脳内に定着させ、それを「きれい」と感じるデジタル的感性になっている。』と述べた。それはアナログ(自然)からデジタル(人工)社会への移行に伴う感性のデジタル化現象であり、人間の生物学的な脳気質の変化をも引き出すものではないかと懸念する内容だった。それでは色ではなく形ではどうだろうか?写真家氏の同時期のもう一つの記事を紹介する。(『』内は原文のまま引用した。)

●「広がる写交性」(日本経済新聞)によると、

昨今、合コンは事前に参加者の顔写真をメールで送る時代である。そして実際会って見ると、実物とは全然違うことも少なくない。「おやおネット」は月額300円弱で写真を自由に修正できる。肌のシミを消し、目鼻立ちをはっきりと「きれい」にする。「修正や演出ではなく、最上級の自分」「化粧直しと同じ。なぜ等身大の自分である必要があるのか」「ネットでのリアルな自分」と続く。『真の姿に限りなく近い形に写すため、技術革新の努力を重ねてきた写真。それが「実物をも超えてしまい、理想を満たすための道具」になってきた。写真の日常化は豊かなコミュニケーションを生む一方、「何が真実なのか」という重い問いも投げかける。実物をかさ上げしながら仮想空間を行き交う情報には、現実そのものを変えてしまいかねない罠(わな)が潜む。』とネットと文明取材班は結ぶ。

●ところで「感性や心のデジタル化」とは何を意味するのだろうか?

フィルムでは白と黒の間の「間引き」の結果、自然でない派手な色を「きれい」と感じるようになり、顔写真では「自由な修正」の結果、人工的な目鼻立ちの顔を「きれい」と感じるようになった。どちらもデジタル技術の進歩によるが、進歩の引き金を引いたのは人間である。二つの話題の背後で進行する懸念される事態は、前号で写真家が予想した「人間の生物学的な脳気質の変化」である。それでは脳気質の変化で人間の何が具体的に変わるのだろうか?また、比喩としてではなく、そもそも感性や心はデジタル化されるものだろうか?感性は知覚あるいは身体に依拠し、心と同じ土俵で語りにくい面があるが、ここでは多く重なり合う部分があることを前提として話を進めたい。

●私「感性や心はデジタル化できるだろうか?」(以下()内は吉田註)知人「そもそも心はデジタル的存在と捉えている。」

(脳がデジタル・コンピュータであるとする考えに対し、英国の科学者マイケル・モーガンはアナログ・コンピュータ論を展開する。知人は心と脳の関連を強く意識している。)私「デジタル化はモノの状態を示す量を数値化して数で表現することだが、具体的に感性や心をどう考えるのか?」

知人「例えば目の前のコップは網膜と神経系を通じ、デジタル的(離散的)に処理される。そのデジタルなコップに対応する感性や心もデジタル的な存在だと思う。」

(つまり、コップは神経の中で一旦バラバ

ラに信号処理されシナプスで再び統合される。統合された「生理体的なコップ」に一对一に対応する「生理体的な心」もデジタル化されうるという意見だ。)

私「外界のコップは連続量であり、網膜に入力された後、デジタル的(離散的)に記憶されると思う。だが心は生理体から離れた存在という考えもあるのではないか?」

知人「デジタル的(離散的)な記憶に対応する心もデジタル的存在だと思う。」

(この答えは心が記憶として生理的に宿ることを前提としている。記憶は本質的に電気信号の集合であり、デジタル的な存在である。)

基本的に物質は自然物も人工物もあまねくデジタル化できるという考えがある。たとえ心が非物質であっても、この世に存在するために物質に依存せざるを得ないのであれば、外形上デジタルとの見分けは難しい。つまり脳気質の変化の事情がどうであれ、見かけ上デジタル化が可能と考えても誤りとはならないようにも思える。

(参考引用文献)

- 1)「広がる写交性」(日本経済新聞連載記事「ネットと文明」第8部一 仮想と現実③、2006年12月28日付)
- 2)「アナログ・ブレイン」(マイケル・モーガン著、新曜社)



●編集後記

「ねむ〜い」一日何回この言葉を使うのかな。「病は気から」とよく言うけれど、眠いのも気からなんて思ってしまうのは、心身ともにたるんでしまった私の勝手な思い込み? 睡眠のお話を伺ってから、帰りの電車はなるべく階段を使ってホームを上り下り、軽く屈伸運動をしたり、お風呂は温めにゆっくりと、上向きに寝て、枕の高さも気をつけている。特に休日の午前中は掃除洗濯、家事労働をしながら太陽の日にあたり、午後にはついつい昼寝。全ては健康、将来の認知症予防の為に自分に言い聞かせながら、毎日恋しいベッドのぬくもり。そんな私であります。皆さん、風邪などひきませんように。(あしだ)

●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX: 03-3814-9152 E-mail: eigyo@nts-book.co.jp

NTSニュース

2007年2月号(通巻96号)
2007年2月6日発行